

舟戸・西岡遺跡第5次
片岡王寺跡第8次・第9次
—2007年度発掘調査報告書—

2009. 2

王 寺 町 教 育 委 員 会

舟戸・西岡遺跡第5次
片岡王寺跡第8次・第9次

—2007年度発掘調査報告書—

序

このたび、王寺町文化財調査報告書第9集を刊行することとなりました。

本書には、2007年度に文化庁の国庫補助事業として実施した舟戸・西岡遺跡第5次と片岡王寺跡第8次・第9次の発掘調査の成果を報告しています。

舟戸・西岡遺跡は、王寺町から河合町にかけて広がる弥生時代後期の高地性集落です。平成9年の発掘調査で王寺町の舟戸山から住居址が検出されました。河合町側には弥生時代から奈良時代以降にかけての土器が散布しています。遺跡と大和川との関係が注目されるとともに、舟戸山の頂上付近には古墳と見られる小山も残っていることから、遺跡の全容解明が期待されるところです。

また、片岡王寺跡は、平成16年に第1次調査が実施されて以来、これまで同寺の盛衰にかかわる多くの遺構・遺物が確認されてきました。本年で寺跡周辺での国道拡幅工事が完了いたしました。次はその沿線での開発が予想されますので、遺跡の性格を十分に把握しておく必要があります。

これ以外の遺跡も含め、今後もさまざまな機会を利用しながら、適宜、遺跡の把握に努め、より一層、埋蔵文化財の保存・活用を図ってまいりたいと考えます。

最後になりましたが、発掘調査の実施にご協力くださいました各事業者をはじめ、文化庁・奈良県教育委員会文化財保存課等、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成21年2月

王寺町教育委員会

教育長 北 義次

例 言

1. 本書は、2007年度に国庫補助事業として王寺町教育委員会が実施した舟戸・西岡遺跡第5次、片岡王寺跡第8次・第9次の発掘調査について報告したものである。

2. 各調査の調査地および調査期間、調査面積などは巻末の報告書抄録に示したとおりである。

3. 各調査は次の体制で実施した。

調査主体	王寺町教育委員会 教育長 北義次、教育次長 中井康員 社会教育課長 藤山雅章
調査担当者	王寺町教育委員会 社会教育課 主事 岡島永昌、同 臨時職員 櫻井恵
整理補助員	古賀萬代（王寺町シルバー人材センター）
発掘作業	株式会社アイアイエイ（舟戸・西岡遺跡第5次） 株式会社ワーク（片岡王寺跡第8次） 安西工業株式会社（片岡王寺跡第9次）
調査協力・助言	文化庁、奈良県教育委員会事務局、池田博、鈴木一議、廣岡孝信、山下隆次、 吉村公男

4. 本書で使用している水準値はT.P.値（東京湾平均海面値）にもとづくものであり、方位は磁北を示すものである。

5. 図2は国土地理院発行の1/25000地形図「信貴山」（平成13年7月1日発行）、「大和高田」（平成14年4月1日発行）および『奈良県遺跡地図』（平成10年3月31日発行）をもとに作成した。図3は河合町発行の「河合町全図1」（1/2500、平成4年修正）をもとに作成し、図5、図12は王寺町発行の「王寺町全図（3）」（1/2500、平成16年修正）をもとに作成した。

6. 土層の土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖23版』に拠った。

7. 出土遺物の実測図については、舟戸・西岡遺跡第5次の土器を1/2、片岡王寺跡第8次・第9次の土器・軒瓦・鳥衾を1/4、丸瓦・平瓦を1/5、金属製品を1/2の縮尺とした。

8. 出土遺物をはじめ調査にかかる記録はすべて王寺町教育委員会において保管している。

9. 本書は、第1章～第3章を岡島永昌が、第4章を櫻井恵が執筆し、岡島・櫻井が編集した。

本文目次

第1章 調査地の歴史的環境	1
第2章 舟戸・西岡遺跡第5次発掘調査	3
第3章 片岡王寺跡第8次発掘調査	6
第4章 片岡王寺跡第9次発掘調査	16

挿図目次

第1章 調査地の歴史的環境	
図1 王寺町の位置	図8 検出遺構平面図・土層断面図（1/50）
図2 調査位置と周辺の遺跡（1/25000）	図9 南拝殿基壇盛土層出土遺物実測図
第2章 舟戸・西岡遺跡第5次発掘調査	図10 拝殿基壇盛土層出土遺物実測図
図3 調査位置図（1/5000）	図11 近世盛土層・遺構出土遺物実測図
図4 トレンチ平面図・断面図（1/50）および 出土遺物実測図（1/2）	第4章 片岡王寺跡第9次発掘調査
第3章 片岡王寺跡第8次発掘調査	図12 調査位置図（1/2000）
図5 調査位置図（1/2500）	図13 1 トレンチ検出遺構平面図・土層断面図 および2 トレンチ土層断面図（1/50）
図6 『神社実測図並見取図』に描かれた片岡神社	図14 1 トレンチ出土遺物実測図
図7 拝殿・南拝殿基壇平面図および拝殿基壇 立面図（1/100）	

写真図版目次

写真図版1 舟戸・西岡遺跡第5次

- 1 トレンチ遺物包含層検出状況（南東から）
 - 2 トレンチ完掘状況（南から）
 - 3 トレンチ完掘状況（西から）
- 出土遺物

写真図版2 片岡王寺跡第8次

- 解体前拝殿（東から）
- 解体前南拝殿（東から）
- 調査前拝殿基壇（北東から）

写真図版3 片岡王寺跡第8次

- 1 トレンチ遺構面A遺構検出状況（南から）
- 2 トレンチ遺構面A遺構検出状況（南から）
- 3 トレンチ遺構面A遺構検出状況（南から）
- 4 トレンチ遺構面A遺構検出状況（東から）

写真図版4 片岡王寺跡第8次

- 1・2 トレンチ石列検出状況（南から）
- 1 トレンチ石列検出状況（南東から）

写真図版5 片岡王寺跡第8次

- 2 トレンチ石列検出状況（北東から）
- 3 トレンチ遺構面B検出状況（南から）
- 4 トレンチ南壁土層断面（北から）

写真図版6 片岡王寺跡第8次

出土遺物1

写真図版7 片岡王寺跡第8次

出土遺物2

写真図版8 片岡王寺跡第9次

- 1 トレンチ遺構検出状況（北西から）
- 1 トレンチ西壁土層断面（東から）

写真図版9 片岡王寺跡第9次

- 2 トレンチ掘削状況（東から）
- 出土遺物

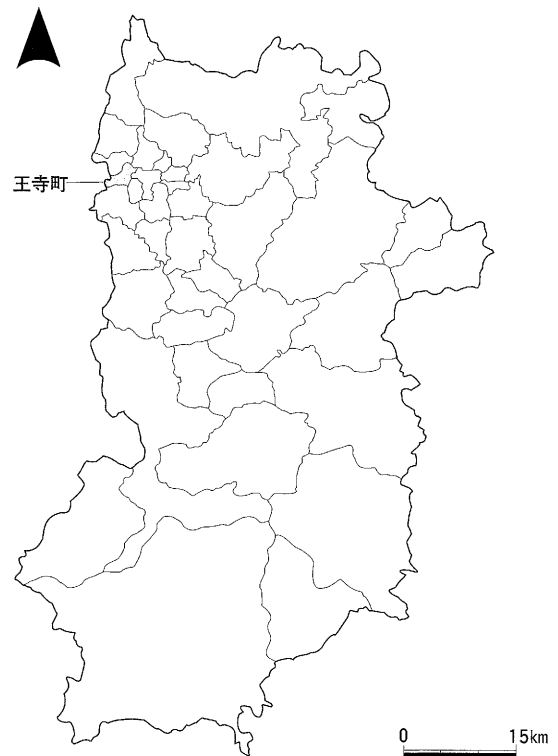


図1 王寺町の位置

第1章 調査地の歴史的環境

本書では、王寺町教育委員会が国庫補助事業として2007年度に実施した3件の発掘調査を報告している。具体的な調査報告をする前に、まずは調査地（王寺町）の歴史的環境について触れておこう。

王寺町は、奈良県の北西部、奈良盆地の西部に位置し、奈良県北葛城郡に所在している。北に奈良県生駒郡三郷町・斑鳩町、東に奈良県北葛城郡河合町・上牧町、南に奈良県香芝市、西に大阪府柏原市と接している。

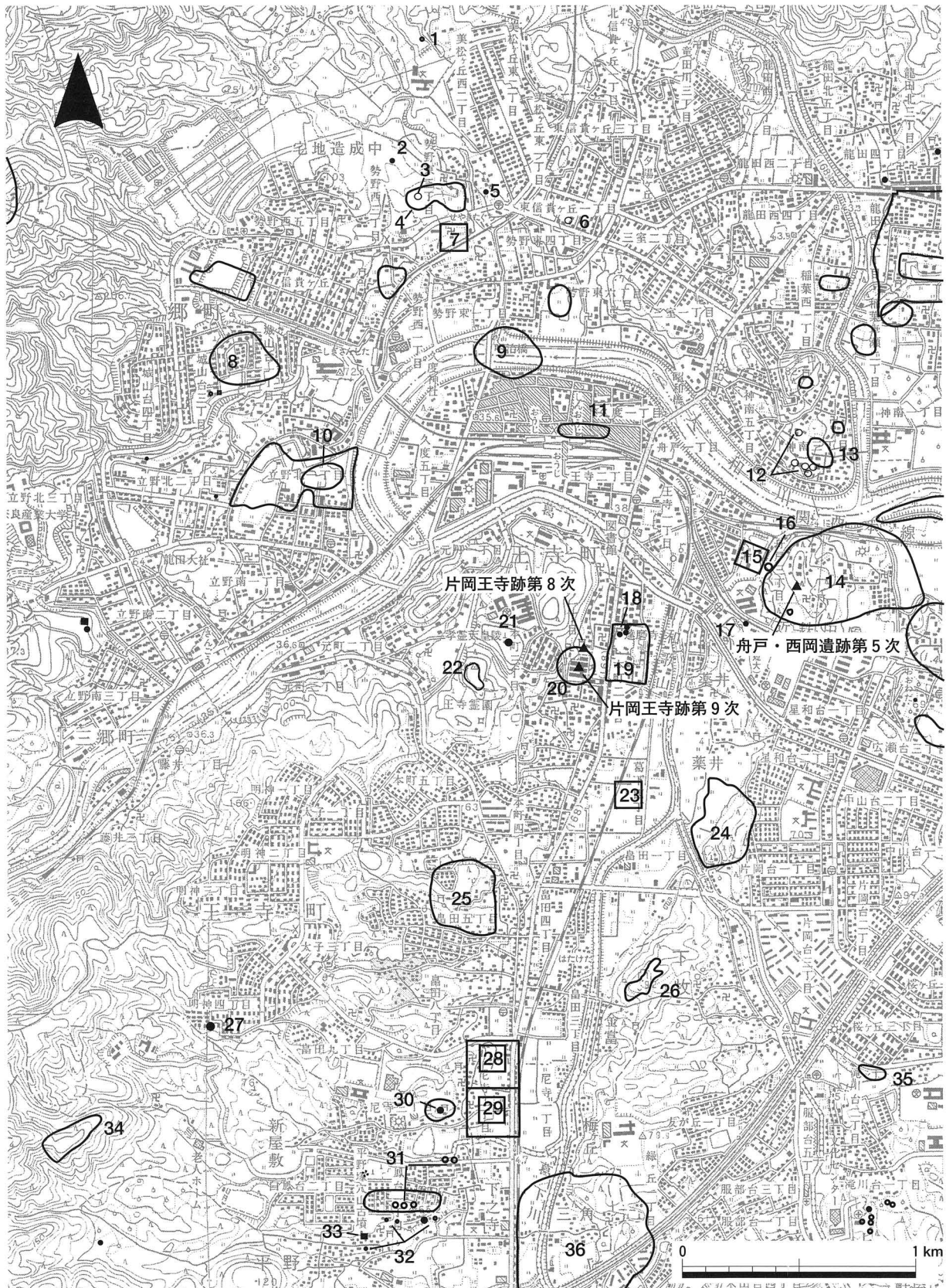
王寺町の歴史的環境において重要なのが、町の北端を大和川が流れていることである。大和川は初瀬川を源流として、奈良盆地の南東部から奈良盆地をほぼ横断するようなかたちで佐保川、寺川、飛鳥川、曾我川、富雄川、竜田川、葛下川の川水を集めながら西流し、亀の瀬の峡谷を抜けて奈良盆地を越え、大阪府側へと流れ出ている。現在はそのまま西流して大阪府堺市で大阪湾に注いでいるが、近世に大和川が付け替えられるまでは石川との合流点付近から北西に流れ、淀川に合流していた。

このように、大和川は奈良盆地内部と大阪湾岸部を結ぶという特性をもっていることから、歴史的に水路として利用されてきた。近世には剣先船・魚梁船と呼ばれる川船が就航し、大坂・大和間の物流を担っていたことは明らかであるが、古くは『日本書紀』の記述から推古天皇16年（608）に隋使裴世清が飛鳥に赴く折にも大和川が利用されたと考えられている。なかでも、王寺町は奈良盆地の諸河川を集め、かつ大阪府側に出る位置にあり、水路の咽喉部にあたる重要な地域である。

舟戸・西岡遺跡（14）は大和川との関係において注目される遺跡である。舟戸山と通称される丘陵は標高が78m程度あり、大和川の南に隣接している。第1次調査では丘陵頂部の南辺において弥生後期の竪穴住居址の一部が検出され、そこに高地性集落が広がるものと考えられた。この遺跡は、王寺町舟戸から河合町大輪田にかけて存在する遺跡で、河合町側では弥生土器のほか土師器・須恵器等も散布している。丘陵東側の斜面上で実施された第2次調査では掘立柱建物が検出された。大和川はもちろん奈良盆地全体が広く見渡せる眺望の良い場所である。

王寺町には大和川を通じた水路だけでなく陸路も存在する。近世には南北に当麻街道が、東西に大坂街道が存在した。当麻街道は現在、聖徳太子葬送の道とも呼ばれている。当麻街道の沿道には達磨寺（19）や片岡王寺跡（20）が存在する。達磨寺は、『日本書紀』推古天皇21年（613）条に記される聖徳太子と飢人による説話を由縁とし、飢人が達磨大師の化身とされ、達磨寺3号墳が達磨大師の廟とされて鎌倉期に成立した寺院である。2002年には寺院成立期のもつと見られる石製宝篋印塔、土師質合子、水晶製五輪塔形舍利容器、舍利が本堂基壇に構築された小石室から入れ子式に出土した。片岡王寺跡は、7世紀前半に敏達天皇系王族によって創建された。現在の王寺町立王寺小学校校舎の部分が主要伽藍跡と見られ、明治20年（1887）頃まで基壇や礎石が残っていたという。石田茂作・保井芳太郎の両氏によって南向きの四天王寺式伽藍配置が想定されている。これまで10次にわたる調査が実施され、現在の国道168号線付近に掘立柱建物が集中し、寺院を区画すると想定される溝が存在することが判明し、片岡王寺が小学校校舎から運動場にかけて広い範囲で展開することが明らかになりつつある。当麻街道で実際に太子の葬送があったかどうかの正否はともかく、古代・中世においても達磨寺・片岡王寺の近辺を街道が通っていたと考えられる。

その他、大和川周辺には旧石器時代の峯ノ阪遺跡（4）をはじめ、峯ノ阪古墳（3）・勢野茶白山古墳（6）・神南古墳群（12）・達磨寺古墳群（18）などの古墳があり、平隆寺跡（7）・西安寺跡（15）・尼寺北廃寺（28）・尼寺廃寺南遺跡（29）の古代寺院が、それに関わって今池瓦窯（1）・辻ノ垣内瓦窯跡（2）・上ノ御所瓦窯（5）・西安寺瓦窯跡（16）・尼寺窯（30）・平野窯跡群（31）の窯跡がある。人々の営みが大和川北側の高台から次第に低地へと移っていく状況が読み取れる。戦国期城郭として立野城跡（8）・片岡城跡（26）があり、2008年には馬ヶ脊城跡（22）を新たに確認した。馬ヶ脊城跡は、城郭の立地や向き、構造などから片岡氏の砦として機能したと考えられ、大和川を挟んだ松永氏との両者の攻防の様子がうかがえる。



- 1 今池瓦窯 2 辻ノ垣内瓦窯跡 3 峯ノ阪古墳 4 峯ノ阪遺跡 5 上ノ御所瓦窯 6 勢野茶臼山古墳 7 平隆寺跡
 8 立野城跡 9 久度遺跡 10 立野遺跡 11 久度南遺跡 12 神南古墳群 13 神南遺跡 14 舟戸・西岡遺跡 15 西安寺跡
 16 西安寺瓦窯跡 17 岩才池北古墳 18 達磨寺古墳群 19 達磨寺 20 片岡王寺跡 21 片岡馬坂陵 22 馬ヶ脊城跡
 23 寺院跡? 24 香滝・薬井遺跡 25 畠田城跡 26 片岡城跡 27 畠田古墳 28 尼寺北廡寺 29 尼寺廡寺南遺跡
 30 尼寺窯 31 平野窯跡群 32 平野古墳群 33 平野塚穴山古墳 34 送迎山城跡 35 下牧瓦窯跡 36 木辻城跡

図2 調査位置と周辺の遺跡 (1/25000)

第2章 舟戸・西岡遺跡第5次発掘調査

1 はじめに

調査の契機 本調査は、王寺町舟戸三丁目4298番18で計画された個人住宅の建設にともない、国庫補助事業として実施したものである。調査地は舟戸山と通称される丘陵上にあり、舟戸・西岡遺跡第1次調査で弥生後期の住居址が確認されたことによって同時期の高地性集落が広がっていると想定された範囲内にあたる。

計画された個人住宅はベタ基礎によるもので、深いところでも設計G Lから約40cmしか掘削しないものであった。しかし、第1次調査では地表面から同程度の深さで遺構面が検出されていること、また調査地は過去の宅地造成で部分的に削平されているように見受けられ、その北側に残る本来の地形に比較するならば、かなり浅い位置で遺構面が検出される可能性もあることから、工事着手前に発掘調査を実施することとなった。調査トレンチは、住宅基礎に影響を与えないように住宅の建設範囲外に設定することとし、敷地の北西側に1トレンチ、北東側に2トレンチ、南側に3トレンチを設定した。

既往の調査 舟戸・西岡遺跡はこれまでに4次の発掘調査が行われている。第1次は1997年に奈良県立橿原考古学研究所によって実施された。本調査は、舟戸山頂部南辺の畑で耕作中に弥生土器が出土したことを契機に行われ、径11~12mに復元される円形住居址の一部が検出、住居址から弥生後期の壺・甕・高杯などが出土した。第2次、第3次は2001年、2005年に河合町教育委員会によって実施され、第2次調査では舟戸山東側の中腹付近で古墳時代~奈良時代と考えられる掘立柱建物が検出された。第4次は2005年に王寺町教育委員会が第1次調査箇所の南側で実施したが、過去の造成が予想以上に激しく、すでに遺跡が破壊されていることが判明した。

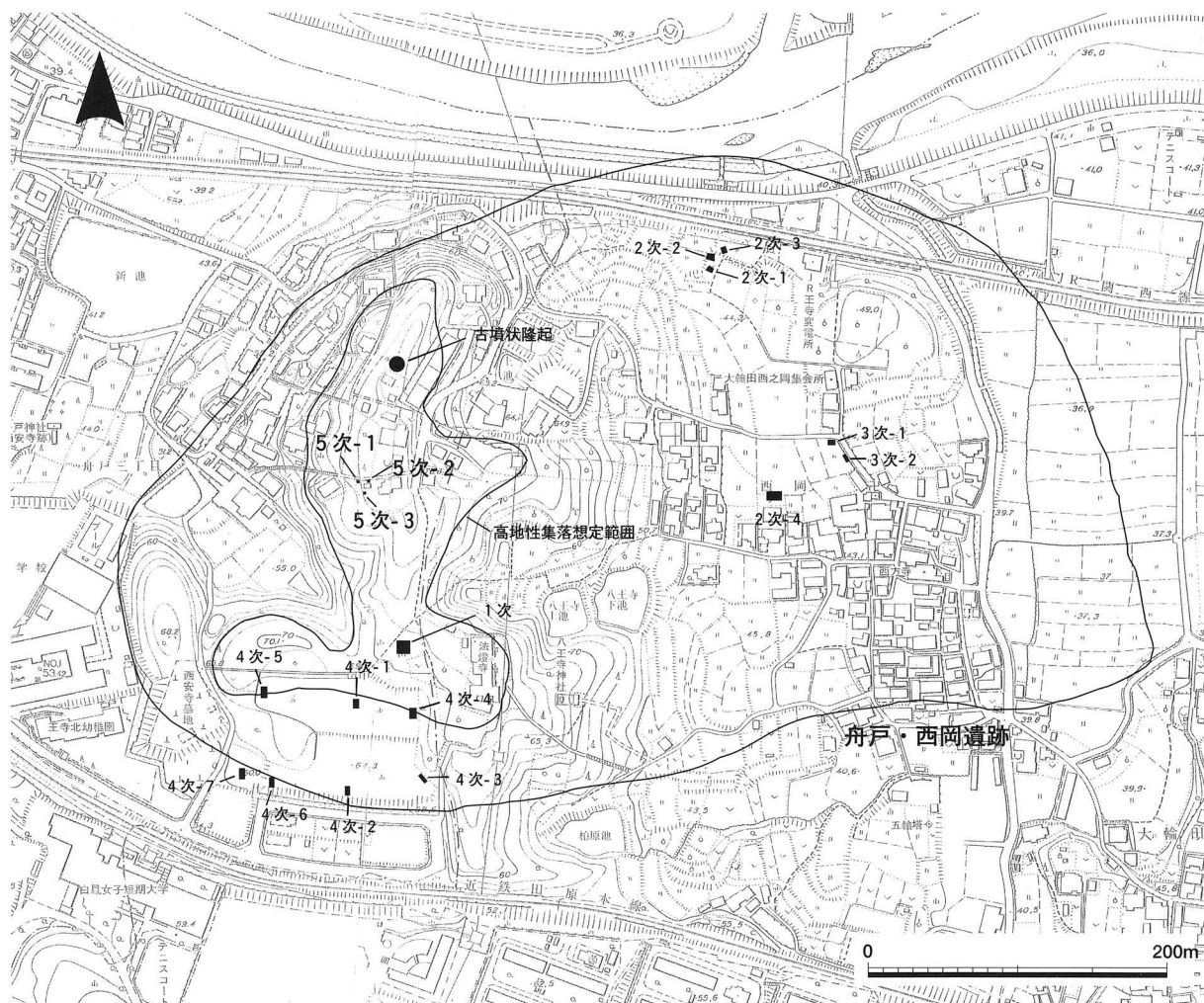


図3 調査位置図 (1/5000)

2 調査の内容

1 トレンチ 敷地の北西側に設けた2×2mのトレンチである。地表面から約50～60cmを掘削した標高77.7～78.0m付近において褐色でシルトを含む粘土の地山を検出し、トレンチ北側から東側にかけて円弧を描くように広がる遺構状の堆積（断面図5層）を確認した。この遺構状の堆積からは出土遺物1の土器片とサヌカイトの剥片が出土した。このため、これを慎重に掘り進めていったが、同時に掘削していた3トレンチの状況からこの遺構状の堆積は遺物包含層であることが判明した。1トレンチでは遺物包含層が最大で約12cm堆積していた。本来はトレンチ全体に均質に堆積していた遺物包含層が、おそらくは現代の宅地造成にともなって削平され、その上に再度、断面図1～3層が盛られたものと考えられる。なお、平面図に示している攪乱は樹木根によるものである。出土遺物1は弥生土器の甕ないし壺の底部で、小片ではあるが外面に押圧とタタキが、内面にハケメが施されているのがわずかに確認できる。弥生後期のものである。

2 トレンチ 敷地の北東側に設けた2×2mのトレンチである。地表面から約20～30cmを掘削した標高78.6～78.7m付近において褐色でシルトの地山を検出した。地山上では遺構状の掘り込みが2基確認できた。1基はトレンチ西壁にまで広がるもので、深さは約79cmと深い。しかし、ここからは針金と木杭が出土していることから近現代の攪乱であることが明らかである。他方、もう1基は深さが約21cmあり、遺物が出土しなかったために判然としないが、遺構埋土が断面図2層と同じ褐色のシルトを含む粘土であるので近現代の攪乱と考えられる。1トレンチの状況からすれば、2トレンチの位置にも本来は弥生土器を含む遺物包含層が堆積していたのが、現代の宅地造成にともなって完全に削平されてしまったのだろう。

3 トレンチ 敷地の南側に設けた2×2mのトレンチである。地表面から約60～70cmを掘削した標高78.1～78.2m付近において黄褐色でシルトを含む粘土の堆積をトレンチ全面に確認した。この土の堆積は1トレンチの断面図5層と同じものである。ここからは出土遺物2と3の土器片が出土した。出土遺物2・3とも弥生土器の甕ないし壺の底部で、小片ではあるが外面にタタキが施されているのがわずかに確認できる。3では残存する底部のうち内面の一部がさらに剥離している。2・3ともに弥生後期。3トレンチからは他にサヌカイトの剥片も1点出土した。

この堆積を半截したところ、約30cmを掘削した標高77.9m付近において褐色でシルトの地山を検出した。検出した地山面がほぼ水平を保っていたために、その上層で確認した堆積は遺構ではなく、遺物包含層であると判断した。地山上では遺構を検出することができなかった。断面図1層が現代の盛土、断面図2層が畑（現代）の耕作土層であることからすれば、3トレンチで確認した約30cmの堆積が本来の遺物包含層の厚さに最も近いのではないかと考えられる。なお、次項で述べるように、個人住宅の建設にあたっては遺物包含層が破壊されることがないため、3トレンチで確認した包含層は半截のままとした。

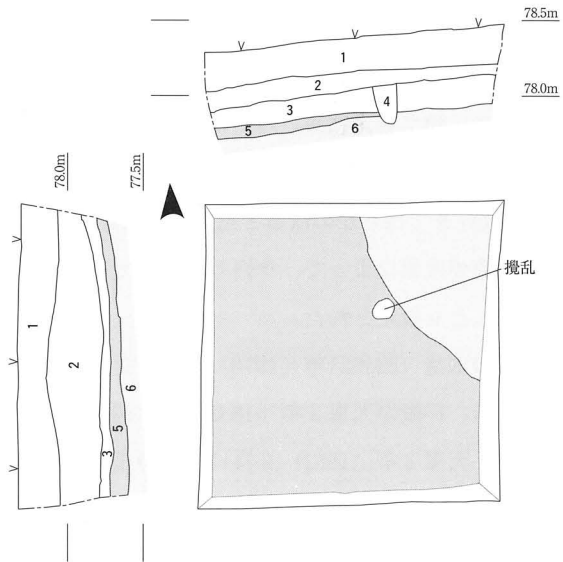
3 調査の成果

以上の調査から、今回の調査箇所は本来、北側から南側、および西側にかけてなだらかに傾斜する部分に位置していたと見られる。そこには全体に弥生土器を含む遺物包含層が堆積していたが、現代の宅地造成によってより高い部分が削平され、一部の遺物包含層が完全に失われてしまったと考えられる。1トレンチで確認した地山と包含層の境目はその削平の痕跡であろう。

今回の調査では、高地性集落に関わる遺構は確認できなかったものの、遺物包含層が堆積していることが確認でき、周辺にも遺構が広がっている可能性がさらに強まったといえる。

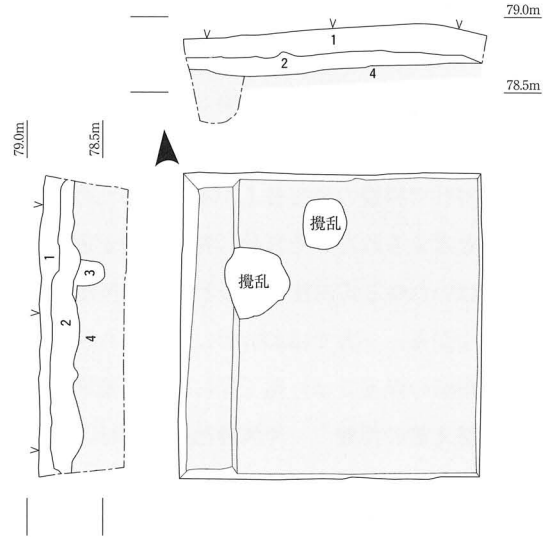
なお、調査の結果、個人住宅の建設にあたっては、その掘削深度から遺物包含層が削平される危険性もないことが判明したため、発掘調査は以上の1～3トレンチのみの調査で終了した。

1 トレンチ

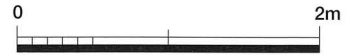


- | | | | |
|---|---------------|----------------------|-------|
| 1 | 10YR4/4 褐 | シルト含む粗粒砂 | |
| 2 | 10YR4/3 にぶい黄褐 | シルト含む粘土 (上端に炭層が薄く堆積) | |
| 3 | 10YR4/6 褐 | シルト含む粘土 | |
| 4 | 10YR4/4 褐 | シルト含む粘土 | |
| 5 | 7.5YR4/4 褐 | シルト含む粘土 | 遺物包含層 |
| 6 | 7.5YR4/6 褐 | シルト含む粘土 | 地山 |

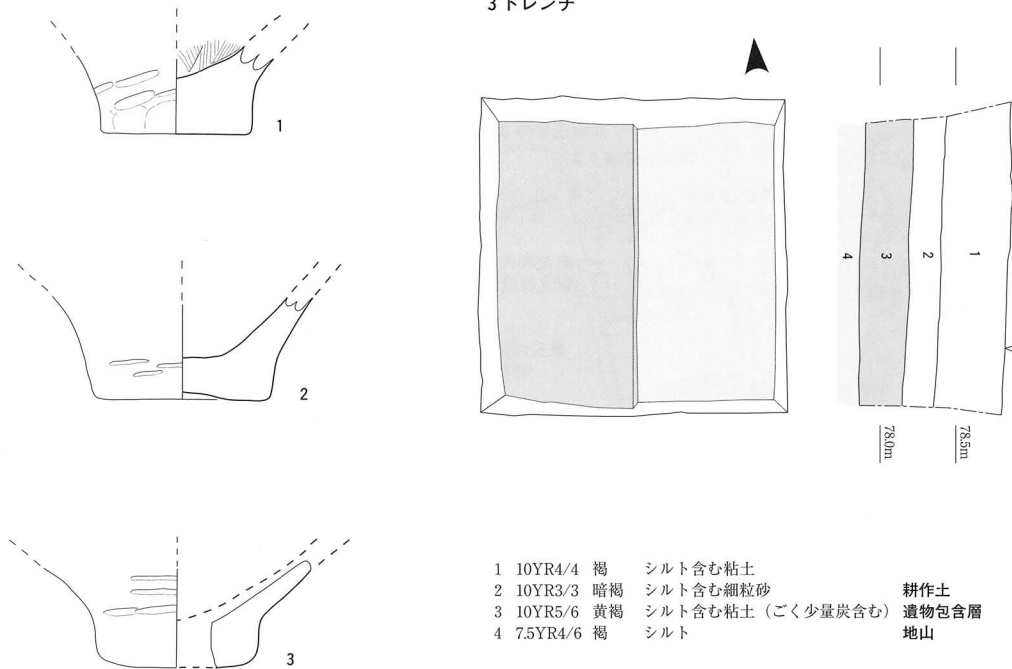
2 トレンチ



- | | | | |
|---|------------|---------|----|
| 1 | 10YR3/3 暗褐 | シルト | |
| 2 | 10YR4/4 褐 | シルト含む粘土 | |
| 3 | 7.5YR4/4 褐 | シルト含む粘土 | 攪乱 |
| 4 | 7.5YR4/6 褐 | シルト | 地山 |



3 トレンチ



- | | | | |
|---|------------|-------------------|-------|
| 1 | 10YR4/4 褐 | シルト含む粘土 | |
| 2 | 10YR3/3 暗褐 | シルト含む細粒砂 | 耕作土 |
| 3 | 10YR5/6 黄褐 | シルト含む粘土 (ごく少量炭含む) | 遺物包含層 |
| 4 | 7.5YR4/6 褐 | シルト | 地山 |



図4 トレンチ平面図・断面図 (1/50) および出土遺物実測図 (1/2)

第3章 片岡王寺跡第8次発掘調査

1 はじめに

調査の契機 片岡王寺跡第8次発掘調査は、王寺町本町二丁目1827番の片岡神社境内において実施した。本調査は、片岡神社にて計画された神社拝殿の建て替えにともなうものである。

片岡神社で拝殿の建て替えが本格化したのは2007年秋頃からで、建て替えにあたっては事前の発掘調査が必要であると考えられた。それは、神社境内が周知の埋蔵文化財包蔵地である片岡王寺跡に該当すること、それに片岡神社はいわゆる式内社であるとされ、神社の創立自体も平安期にまではさかのぼると見られることからである。しかしながら、一方では2007年に実施した片岡王寺跡第6次調査の成果によって、今回の拝殿建て替え工事で行われる掘削の深度では片岡王寺に関わる遺構面まで到達しないことも推定された。

建て替え前の拝殿 片岡神社の建物は、本殿が19世紀後期の木造（昭和51年〔1976〕にセメントによる壁補修）で、本殿と拝殿をつなぐ渡り廊下が昭和9年（1934）の木造、拝殿が天保3年（1832）の木造である。

拝殿に関しては、建物から取り外された棟札が現存しており、天保3年（1832）9月に当時の王寺村庄屋竹田新七と王寺村年寄9名を願主にして、庄兵衛を大工にして建立されたことが判明する。この南側にはもうひとつ、「南拝殿」と称される拝殿が隣接して建てられていた。これは明治42年（1909）に大田口の金計神社、白瓜の大原神社、門前の住吉神社を合祀したさいに、金計神社の拝殿を移築したものである。今回、建て替えられることとなったのは、この片岡神社の拝殿と金計神社ほかの南拝殿の2棟である。したがって拝殿は、昭和51年（1976）の本殿補修に合わせて屋根瓦が葺き替えられ、一部が改修されたものの基本的には近世の躯体からなっていた。つまり、建物基壇も近世のままの状態で残されていることが予想され、場合によっては近世基壇の直下で、近世以前の神社建物遺構が検出されることも考えられた。

調査の方法 以上のようなことから、拝殿・南拝殿の建て替えにあたっては工事着手前に工事の掘削深度内において片岡王寺に関する遺構の有無と、近世以前の片岡神社に関する遺構の有無を確認するための発掘調査を実施することとした。



図5 調査位置図（1/2500）

2007年10月に秋の大祭が行われた後、年末にかけて解体工事が実施された。解体工事は拝殿・南拝殿の基壇を残すかたちで行い、2008年1月15日から同月30日まで拝殿基壇内に4ヶ所のトレンチを設定して発掘調査を実施。合わせて建て替え以前の拝殿基壇を実測して記録した。調査は国庫補助事業による遺構有無の確認調査として行い、工事の掘削範囲内で実施したために地山まで掘削しなかった。

2 調査の内容

拝殿の状況 片岡神社の拝殿は桁行5間、梁間2間で平入り、中央部分を板間の廊下にして左右に間を配する割拝殿の形式をとる。東面を正面にして、そこに縁を、その中央には階段、唐破風をつける。屋根は入母屋造で棧瓦葺、唐破風は銅板葺である。

基壇は桁行の南北が11m、梁間の東西が4m。西から東に傾斜して落ちていく地形を利用して築いている。基壇の西端は石積みがなく、長さ1.3～4.5mの延べ石を並べるだけであるのに対し、東端には幅50cm前後、高さ20cm前後の切石を2段に積み上げていた。

拝殿の室内には絵馬が壁全体を覆うように掲げられていた。この絵馬は、片岡神社の氏子に子供が生まれたさいに奉納するもので、現代にまで続く信仰である。近年は男の子の場合は宇治川先陣の図柄、女の子の場合は尉と婆の図柄の絵馬が選ばれることが多い。また、これとは別に安永7年(1778)と文化14年(1817)に村として奉納された雨乞いに関する大絵馬4点も掲げられていた。

南拝殿の状況 片岡神社拝殿の南側に隣接して明治に移築された拝殿である。大田口の金計神社から移築されたものであるため、建物自体は近世にさかのぼると考えられる。桁行5間、梁間2間の平入りで東を正面とする。屋根は入母屋造、棧瓦葺である。北端には桁行1間分の祭祀具を納める倉庫が接しており、これが片岡神社拝殿とをつないでいた。

基壇は桁行の南北が8m、梁間の東西が2.8mであるが、このうち桁行の北から1.2mは倉庫部分にあたるため、南拝殿の規模としては桁行が6.8mとなる。基壇は拝殿のそれと同じく地形の傾斜を利用して築き、東端にだけ切石を2段に積み上げていた。南拝殿の室内にも金計神社・大原神社・住吉神社の氏子の絵馬が多く掲げられていた。

トレンチの配置 拝殿・南拝殿の基壇のなかに4ヶ所のトレンチを設定した。1トレンチが南拝殿基壇の南寄りに設定した南北長3m、東西幅1mのトレンチ(のち全長3.5mに拡張)、2トレンチが南拝殿基壇の北寄りに設定した南北長3m、東西幅1mのトレンチ(のち部分的に全長3.5m、幅1.4mに拡張)、3トレンチが拝殿基壇の南寄りに設定した南北長3m、東西幅1mのトレンチ、4トレンチが拝殿基壇の中央付近に設定した東西長3m、南北幅1mのトレンチである。当初は拝殿基壇の北寄りにも南北長3m、東西幅1mの5トレンチを設定して掘削する予定であったが、1～4トレンチの掘削状況から新たに設定して掘削する必要がないと判断したため、4ヶ所の掘削だけで調査を終えた。

層序 層序は1～4トレンチで基本的には共通しているが、基壇の構築年代が異なるため、南拝殿基壇に設定した1・2トレンチと拝殿基壇に設定した3・4トレンチで若干の違いが認められる。1・2トレンチは上層から近代の南拝殿基壇盛土層、近世盛土A層(遺構面Aを形成する層)、近世盛土B層(遺構面Bを形成する層)の3層で、3・4トレンチは上層から近世の拝殿基壇盛土層、近世盛土A層(遺構面Aを形成する層)、近世盛土B層(遺構面Bを形成する層)の3層である。

1トレンチ 南拝殿の基壇盛土層は10YR4/3にぶい黄褐色のシルト～粗粒砂で、標高44.4m付近を上面にして約60cmの堆積がある。近世～近代の瓦類が数多く出土した。明治42年(1909)に金計神社ほか都合祀され、南拝殿が移築されたときに構築された基壇盛土層である。

近世盛土A層は5Y4/3暗オリーブ色のシルト混じり細粒砂で、標高43.7～43.8m付近を上面にして約20～25cmの

堆積がある。この層の上面からはSD06、SP07、SK08・09の遺構を検出した（これを遺構面Aとした）。SD06からは近世の磁器碗・土師器皿が出土しており、遺構面Aが明治の南拝殿基壇構築までの地表面であったことがうかがえる。明治24年（1891）の『神社実測図並見取図』（奈良県立図書情報館所蔵）には、南拝殿が移築される以前の片岡神社境内が描かれており、天保3年（1832）拝殿の南側が空き地になっていることがわかる。



図6 『神社実測図並見取図』に描かれた片岡神社

近世盛土B層は2.5Y5/3黄褐色のシルト混じり細粒砂で、標高43.5m付近を上面にして

15cm以上の堆積がある。この層の上面からは2トレンチのものと組み合わせる石列を検出した（これを遺構面Bとした）。1トレンチで検出した石は南北軸70cm以上、東西軸50cm以上の長方形をなすものと見られる。石の上面、中央付近には一辺18cmの正方形と見られる柱痕跡が認められた。柱痕跡は礎石にのせられた柱が火災に遭ったようで、その部分が赤く焼けた状態で確認できた。ただし、この柱痕跡と石列が同時期のものかどうか判断しがたく、石列は礎石が転用された結果であるとも見ることできる。この層からは土師器片・瓦片が出土している。瓦は詳細な時期が明確でないが、近世のものである。

2トレンチ 南拝殿の基壇盛土層は10YR4/3にぶい黄褐色の細粒砂で、標高44.4m付近を上面にして約60cmの堆積がある。近世の土師器皿、近世～近代の瓦類が多く出土した。

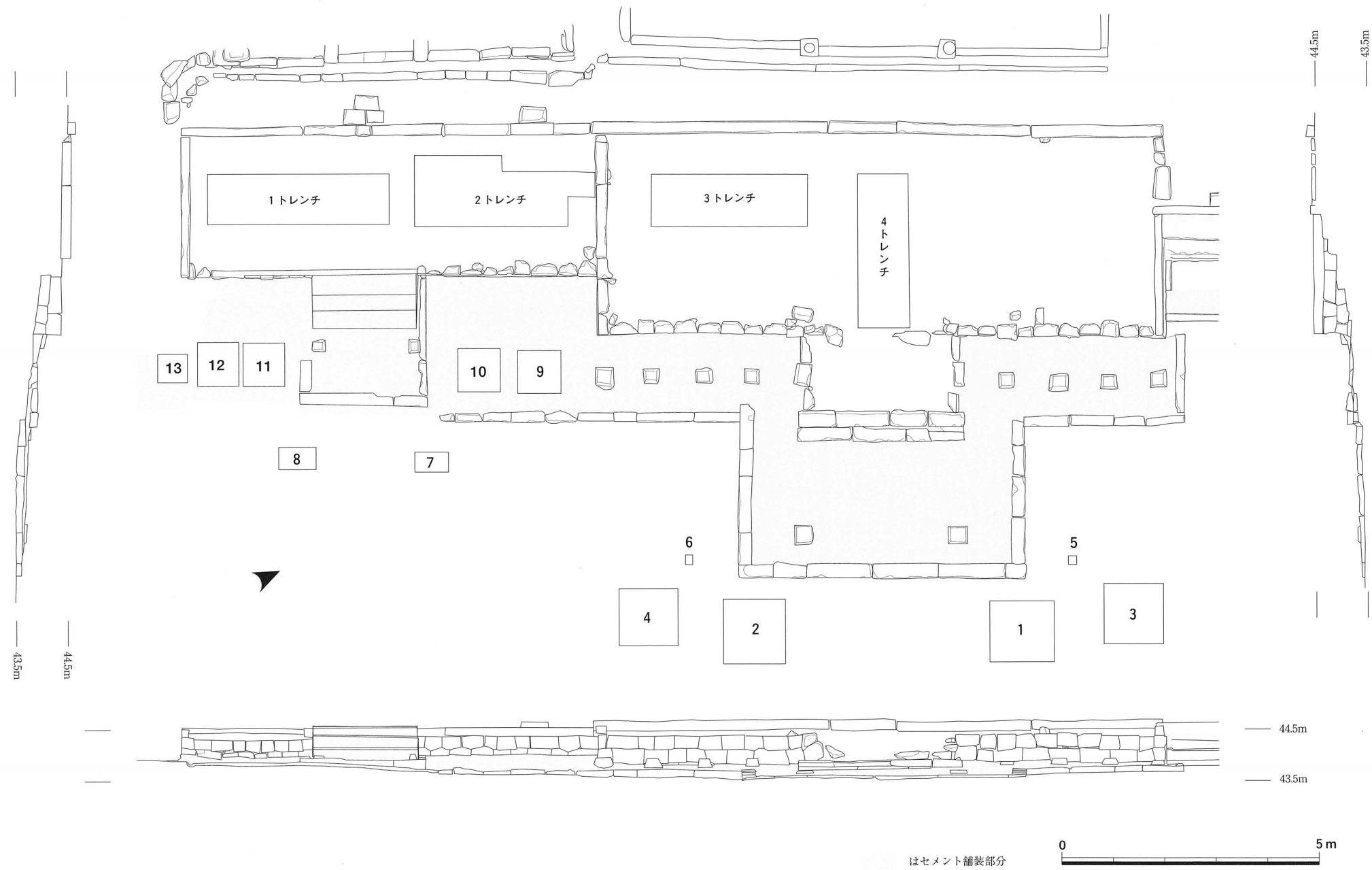
近世盛土A層は2.5Y4/3オリーブ褐色のシルト混じり細粒砂で、標高43.7～43.8m付近を上面にして約15～20cmの堆積がある。この層の上面からはSD01・02、SP03・04・05を検出した。1トレンチの遺構面Aと同じである。SP03～05は小規模な柱穴であり、SD01からは近世の磁器碗片・土師器皿が出土した。これも明治の南拝殿基壇構築までの地表面であったと考えられる。

近世盛土B層は2.5Y4/2暗灰黄色のシルト混じり細粒砂で、標高43.6m付近を上面にして15cm以上の堆積がある。この層の上面からは1トレンチのものと組み合わせる石列を検出し、石の南側近くから複数の平瓦の堆積が検出できた。平瓦は古代ないし中世のものである。2トレンチで検出した石は南北軸110cm、東西軸52cmの長方形に近いもので、上面がほぼ平坦になっており、柱を据えることが可能である。1トレンチで検出した石の柱痕跡から2トレンチの石の中央部分までの距離は1.8mで、この石列が礎石列である可能性も指摘できる。石列は磁北に対して東に10°振れている。これまで片岡王寺跡の遺構として検出した掘立柱建物などの振れとは異なっている。時期的に見ても片岡神社に関する遺構と考えられる。

3トレンチ 近世の拝殿基壇盛土層は10YR4/6褐色の粗粒砂～細粒砂で、標高44.3m付近を上面にして約40～50cmの堆積がある。近世の土師器皿が多く出土し、合わせて磁器碗片、寛永通宝、小判形金属製品なども出土した。

近世盛土A層は標高43.8～43.9m付近を上面とし、10YR4/3にぶい黄褐色でシルト混じり細粒砂を埋土とするSD10を検出した。SD10は20～30cmの深さがある。1・2トレンチの遺構面Aと同じ面と考えられる。SD10からは土師器皿・磁器碗片・瓦片が出土した。

近世盛土B層は2.5Y5/3黄褐色の細粒砂で、43.7m付近を上面として約10～15cmの堆積がある。SP11を検出した。SP11は深さ約10cmであるものの柱穴状をなしている。SP11からは瓦片が出土した。1・2トレンチの遺構面B



番号	種類	銘文 (東面)	銘文 (西面)	銘文 (南面)	銘文 (北面)
1	樹木石柵	奉	谷義一／辻本達夫／時昭和九年／十一月吉辰		
2	樹木石柵	献	大阪豊田宇左衛門／全豊田国三郎／谷甚四郎／谷正治		
3	石灯笼	御神灯	文化十四丑九月吉日		
4	石灯笼	御神灯	文化十四丑九月吉日		
5	石柱	御大典	大正四年		
6	石柱	奉紀念	施主清原福松		
7	狛犬阿形	奉		土谷丈助	嘉永元年
8	狛犬吽形	献		申十月晦日	中村忠兵衛
9	石灯笼	金計神社		明治十四年一月日	氏子中
10	石灯笼	金計神社		氏子中	明治十四年一月日
11	石灯笼	常夜灯		願主松本善兵衛	天保十二〇〇年六月吉辰
12	石灯笼	常夜灯		願主松本善兵衛	天保十二〇〇年六月吉辰
13	石灯笼	御神灯		願主当□新右衛門	文久□壬年□月日

図7 拜殿・南拜殿基壇平面図および拜殿基壇立面図 (1/100)

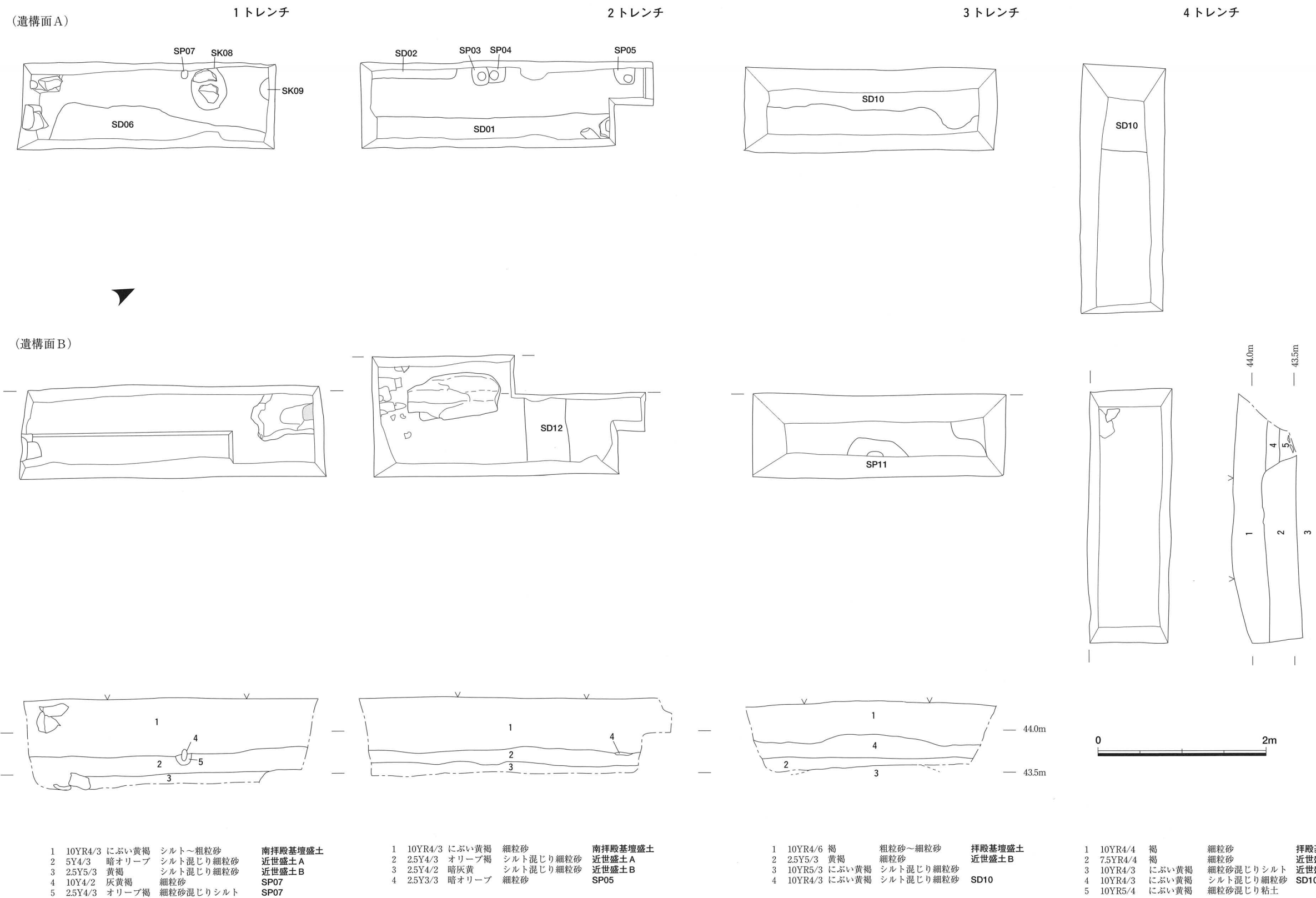


図8 検出遺構平面図・土層断面図 (1/50)

にあたると考えられる。近世の拝殿基壇盛土層上面から約80cmを掘削した近世盛土B層の下層からは10YR5/3に
 ぶい黄褐色でシルト混じり細粒砂の層を確認した。おそらくは中世の遺構面になると見られるが、工事の掘削深
 度を超えていたためにこれ以上の掘削は行わなかった。

4 トレンチ 拝殿基壇の中央部に東西方向に設定したトレンチである。近世の拝殿基壇盛土層は10YR4/4褐
 色の細粒砂で、標高44.2m付近を上面にして約40cmの堆積がある。ただし、トレンチの東端は拝殿の出入口とし
 て階段が設けられていた部分であるため、基壇の石積みがなく東に低く傾斜する法面がかたちづくられている。
 拝殿基壇盛土層からは近世の土師器皿や瓦が多く出土した。

近世盛土A層は7.5YR4/4褐色の細粒砂で、標高43.8m付近を上面にして約40cmの堆積がある。3トレンチから
 続くSD10を検出した。1・2・3トレンチの遺構面Aと共通する遺構面である。

近世盛土B層は10YR4/3にぶい黄褐色の細粒砂混じりシルトで、標高43.5m付近を上面とする。工事との関係
 上、近世の拝殿基壇盛土層上面から約80cmを掘削した当該層上面で掘削を終了した。

3 出土遺物

南拝殿基壇盛土層 1～3は土師器皿である。口径は1が8.8cm、2が9.0cm、3が9.1cmで、1・3に煤の付
 着が見られる。いずれも近世以降の灯明皿である。4は肥前系磁器碗で見込が蛇の目釉剥ぎされる。18世紀中葉
 から後葉の遺物である。

5は右巻きの三頭巴文軒丸瓦で瓦当だけが残る。径13.4cm。内圏線・外圏線ともになく、珠文が大振りで、い
 ぶしによって焼成されている。丸瓦部との接合はカキ目を施したうえでっており、瓦当裏面の下半には円周に

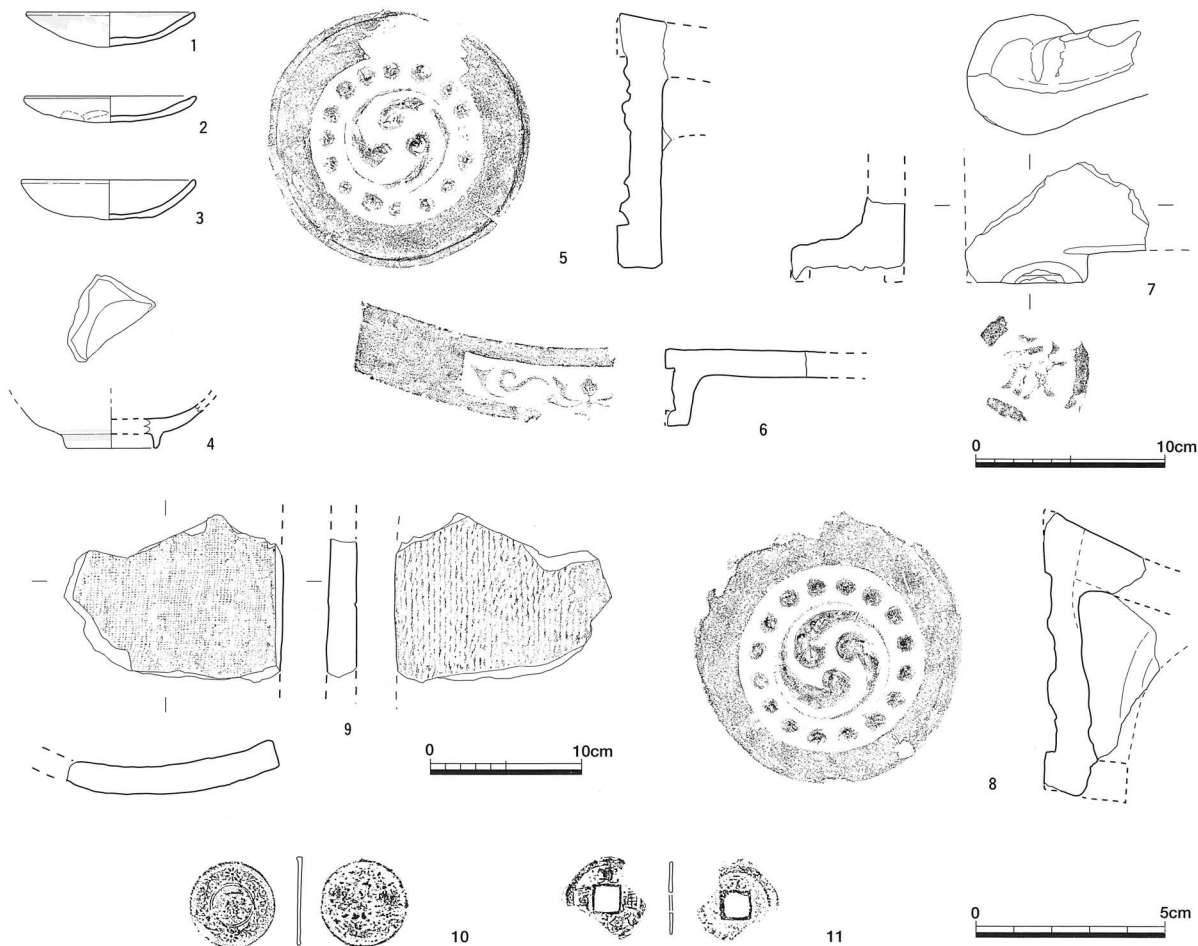


図9 南拝殿基壇盛土層出土遺物実測図 (1～2：1トレンチ、3～11：2トレンチ)

沿ったナデがある。近世中後期のものである。6は近世の均整唐草文軒平瓦、7は小丸部の瓦当に「放」の字があしらわれた棧瓦である。一般に棧瓦は18世紀前半から使用されはじめる。「放」の字は片岡神社に隣接する放光寺を指し、同寺で葺かれていた瓦であろう。8は右巻きの三頭巴文鳥衾である。径14.5cm、内圏線・外圏線がなく珠文が大きい。鳥衾先端の瓦当近くには、中央から下半にかけて大振りの唐草文がヘラ状工具によって焼成前に施されている。焼成にはいぶしがともなっている。近世中後期の鳥衾である。9は古代の平瓦で、凹面に模骨痕と布目痕が、凸面に縄叩き痕が見られる。片岡王寺に葺かれていた瓦と考えられる。

10は一銭青銅貨で、径2.3cm、厚さ1mm。表面中央に「一銭」と表記され、裏面には中央に桐文を配して上部に「大日本」、下部に「大正十三」と鑄造年を表記する。11は新寛永通宝で、径2.2cm、厚さ1mm。裏面上部に「元」の字が見られ、寛保元年（1741）鑄造の高津銭であることが判明する。

拝殿基壇盛土層 12～14は土師器皿である。口径は12が7.6cm、13が8.9cm、14が8.5cmで、いずれにも煤が付着している。近世の灯明皿である。15は肥前系磁器碗で、見込にコンニャク印判がある。16は肥前系磁器の皿で、見込にコンニャク印判と蛇の目釉剥ぎが見られる。18世紀中葉から後葉の遺物である。17は青磁碗で見込に装飾が描きこまれる。高台は貼り付けたのちにケズリでつくられ、高台の底面と内部には釉薬がない。

18は凹面に鉄線切りの痕跡、凸面に縦方向のヘラケズリが見られる近世中後期の丸瓦である。

19は径2.9cm、厚さ1.2mm、寛永通宝の四文銭で裏面が11波。明和6年（1769）の鑄造である。20は径2.5cm、厚さ1.2mmの銭貨で、表面に「通宝」の文字を合わせて4文字が、裏面にも2文字以上の文字があることが認識できるが、腐食のためにすべてを読み取ることができない。21は小判形の金属製品で、長軸6.3cm、短軸3.3cm、厚さ1.2mmである。片面に上端から下方に放射状に延びる線刻を基調として、線刻の間に生じた空間に小粒の円を配した装飾が刻まれている。制作年代・用途ともによくわからない。

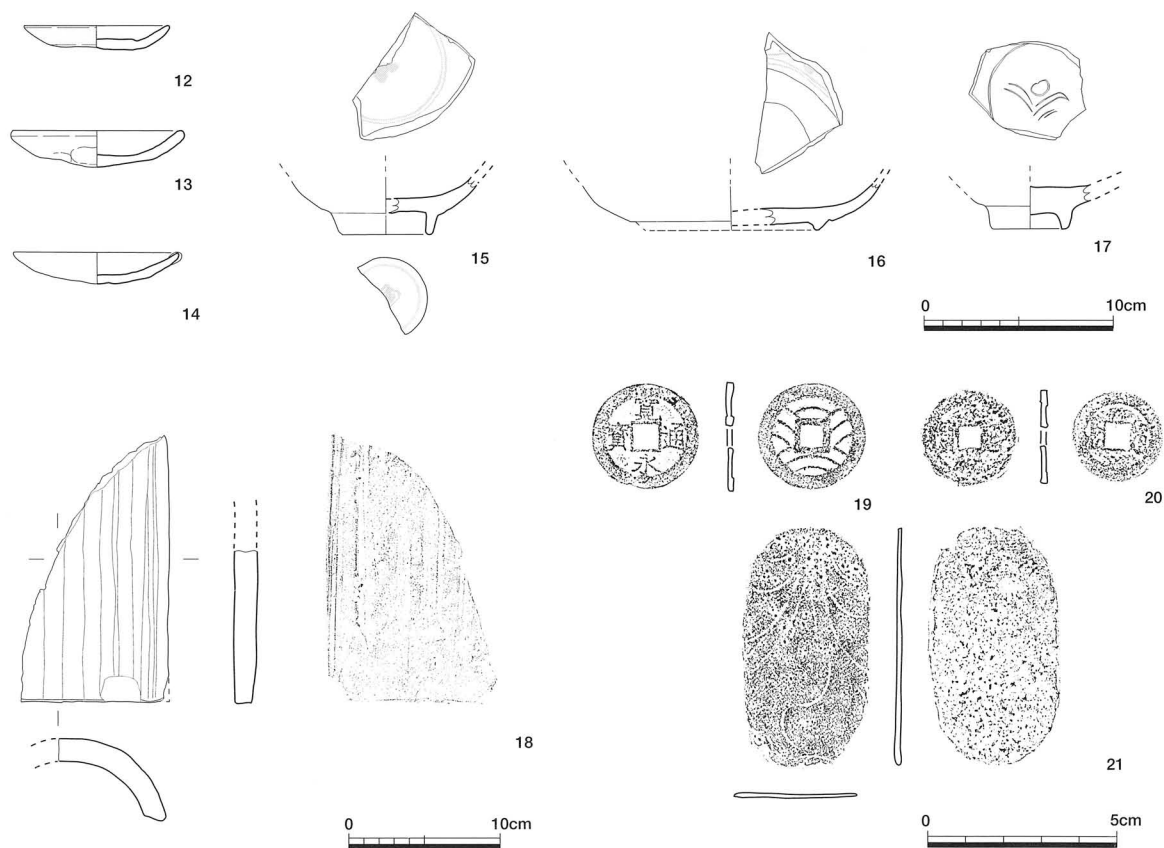


図10 拝殿基壇盛土層出土遺物実測図（12～19・21：3トレンチ、20：4トレンチ）

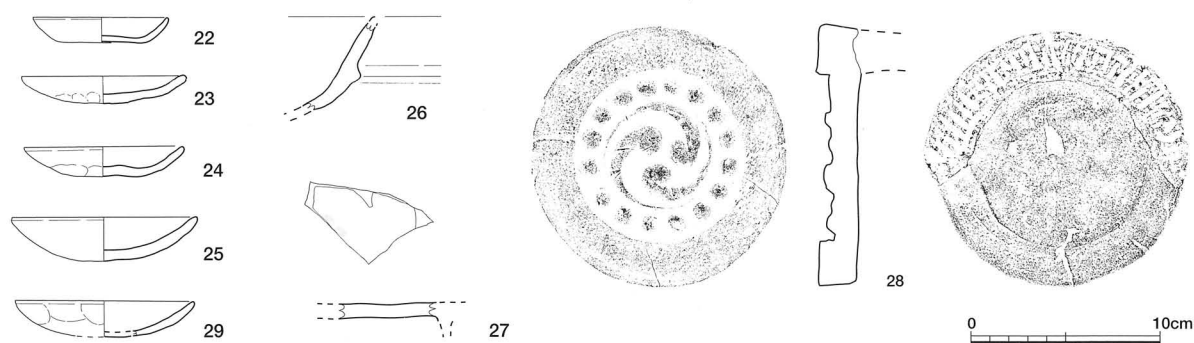


図11 近世盛土層・遺構出土遺物実測図（22～27：盛土A層、28：SP04、29：盛土B層）

近世盛土層 22～25は近世盛土A層から出土した土師器皿である。22・25が2トレンチ、23が1トレンチ、24が4トレンチから出土した。口径は22が7.1cm、23が8.5cm、24が8.3cm、25が9.7cmである。22～24の底部は扁平であるのに対して、25はやや丸みを帯びている。22～24には煤が付着しているので、近世の灯明皿と考えられる。25は灯明皿以外の用途も考えられるだろう。26は同じく近世盛土A層（1トレンチ）から出土した近世の焙烙である。外面の口縁部近くに1条の突帯をもっている。

27も近世盛土A層（4トレンチ）から出土したもので、肥前系磁器皿の見込部分である。コンニャク印判が見られる。

28は2トレンチで遺構面Aから検出したSP04の出土遺物である。径13.8cmの左巻き三頭巴文軒丸瓦で、瓦当部だけが残る。内圏線・外圏線ともなく、珠文も大きい。丸瓦との接合はカキ目を施したうえで行っており、瓦当裏面の下方には円周に沿った強いナデが見られる。近世中後期の瓦である。

29は近世盛土B層（3トレンチ）から出土した土師器皿である。全体の1/5程度が残存するだけで、口径9.4cm、器高1.8cmに復元できる。外面口縁部付近には指頭圧痕が見られ、内外面ともにナデで仕上げられている。近世の遺物である。図化していないが、その他にも近世盛土B層からはいぶし焼成による平瓦片などが出土している。

4 まとめ

最後に、以上の調査成果を得て推測される片岡神社拝殿の変遷を考えておこう。まず、棟札などの記録類から、拝殿は天保3年（1832）の建立、南拝殿は明治42年（1909）の移築であると考えられた。このことは、おおむね今回の調査によっても裏づけられたといえる。考古学的には詳細な年代まで確定させることができないが、南拝殿の基壇盛土層からは近代遺物が出土したのに対して、拝殿の基壇盛土層からは近世後期以降の遺物は出土していない。近世盛土A層の上面には遺構面Aが形成され、1～4トレンチのすべてにおいて遺構が検出された。したがって、この面が天保3年（1832）に拝殿が建立されるまで、および1・2トレンチではそれ以降、明治42年（1909）に南拝殿が移築されるまでの地表面と考えられる。

さらに、近世盛土A層の下層には近世盛土B層があり、その上面には遺構面Bが形成されていた。遺構面Bからは石列を検出した。これが礎石列であるのかどうかの判断は今回の調査からだけでは難しいが、石の配置間隔が1.8mであることからするならば、礎石列と考えておく方が無難である。そうすると、この石列は天保3年（1832）以前の拝殿にともなう礎石列と考えられ、天保の拝殿とは明らかに主軸を異にしていることがわかる。つまり、このときを境に片岡神社の建物のあり様が大きく変容していることになり、今後、付近で発掘調査することがあれば、このことに十分注意して取り組む必要がある。

また、今回の調査では片岡王寺に関する遺構、ならびに中世以前の片岡神社に関する遺構が確認できなかったため、追加調査はしないで新拝殿の建築工事に移行した。

第4章 片岡王寺跡第9次発掘調査

1 はじめに

調査の目的 片岡王寺跡第9次調査は片岡王寺跡の遺跡範囲確認調査として王寺町本町二丁目1698番1に所在する王寺町立王寺小学校において実施した。

王寺小学校の校舎部分は、明治20年（1887）頃まで基壇・礎石が残っていたことが保井芳太郎・石田茂作氏らによって報告されており、片岡王寺の中心伽藍が想定されている場所である。王寺小学校は明治7年（1874）、篤教館として放光寺庫裏を仮校舎として創設され、その学び舎は明治26年（1893）に木造校舎を建設し、昭和34～45年（1959～70）にかけて鉄筋校舎に改築・増築を行っている。鉄筋校舎建設にさいして発掘調査は実施されなかったため、片岡王寺の中心伽藍の遺構については不明のままに現在に至っている。今回の調査は校舎の間にある中庭にトレンチを設定し、遺物、遺構面の残存状況を確認することを目的として行った。

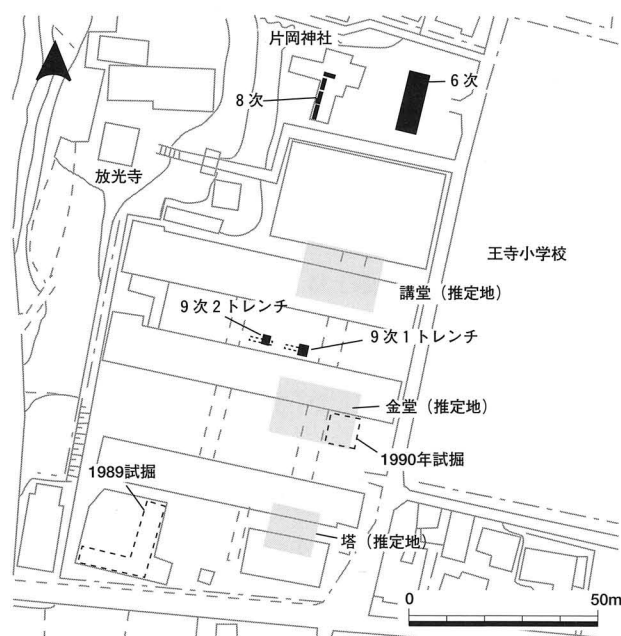


図12 調査位置図（1/2000）

今回の調査は校舎の間にある中庭にトレンチを設定し、遺物、遺構面の残存状況を確認することを目的として行った。

既往の調査 これまでに片岡王寺跡では、檀原考古学研究所による国道168号線拡幅工事にともなう調査（1、4、5、7、10次）、町教委による調査（2、3、6次）が実施されている。これらの調査によって、古代から中世の片岡王寺に関連する遺構が確認され、とくに寺域の東辺についての情報を得ることができている。それ以前、調査回数にはあげられていないが、王寺小学校内で2度の試掘調査が行われている。1989年の給食調理場の建設、1990年の小学校改築にともなう試掘調査である。1989年の調査では表土下80cm程度で池（沼）と思われるヘドロ層から瓦などが出土したものの、それ以下の層の粘土層や砂層からの遺物の出土はなかった。1990年の調査地は中心伽藍の金堂の推定地にあたっている。『放光寺古今縁起』には金堂について敏達8年に建立、永承元年（1046）に雷火によって焼失、応安4年（1371）に再建したと記されている。推定位置が正しく、遺構が破壊されていないければ相応の成果が得られたはずであるが、この調査では土層断面で時期が不明な溝の堆積層が確認されただけで明確な基壇遺構は検出されていない。このように中心伽藍については、保井・石田両氏の報告がなされてからまったく進展が見られていない状況である。

2 調査の内容

調査の経過 中庭に埋設されている排水施設などを避け、1×6mのトレンチを2ヶ所設定し人力掘削によって調査を開始した。しかし、掘削が深さ1mを超えることが判明したため、それぞれ2×1.5mの調査区へと変更した。1トレンチでは遺構が確認できたので、その遺構を明らかにするためにさらに拡張し、最終的に2.5×1.5mのトレンチとなった。一方、2トレンチは中庭の池からの湧水とガス管理設の攪乱の影響により、調査面積が0.38㎡となり、土層断面で層位を確認して調査を終了した。

層序 基本土層として3層の堆積を確認した。上層から1層は中庭の整備、校舎建て替えによる整地土で厚さ約1mである。2層は7.5Y3/1オリーブ黒色細粒砂混じりシルトで厚さ10cm。1トレンチでは本層上面で素掘溝を検出しており、耕作土と考えられる。土師器、古代～中世の瓦、銭貨、炭が出土している。3層は地山であ

る。1トレンチでは5Y7/1灰白色粘土、7.5Y7/2灰白色細粒砂混じり粘土、2トレンチでは10Y5/1灰色細粒砂混じりシルト、2.5GY5/1オリブ灰色粗粒砂混じり細粒砂で、検出面は両トレンチとも標高42.9m付近である。1トレンチの本層上面では複数の遺構を検出した。そして、本層以下の層位を確認するために調査区西半分を標高42.3m付近まで掘削し、断面観察を行った。層位に大きな変化は認められず遺物の出土もないことから、地山と判断した。なお、2トレンチでは、2層の耕作土、地山上での遺構は確認できなかった。中庭の整地土および校舎建て替えによる整地土に加えそれともなう攪乱が地山まで達しており、削平を受けていると考えられる。

1トレンチ 2層上面では南北方向に伸びる素掘溝を2条検出した。素掘溝1は幅30cm、深さ6cm、埋土は2.5Y4/1黄灰色細粒砂混じりシルトである。素掘溝2は西壁にかかり幅は確認できないが、深さ8cmである。2層(耕作土)からは古代~中世の瓦、8の元豊通宝(北宋銭、1074年初鑄)が出土した。

3層(地山)上面では7基の遺構を検出した。最も新しい遺構はSD01である。SD01は調査区の南端で東西方向に伸びるとされる溝状遺構である。深さは最も深いところで24cmである。埋土は2層に分かれ、上層が2.5GY4/1暗オリブ灰色細粒砂、下層が10Y5/2オリブ灰色細粒砂である。上層からは遺構の表面を覆うほどの瓦が出土したが、下層からはほとんど出土しなかった。1は瓦質の挿鉢で口縁が外曲しており、片口が施されている。2は唐草文が施される軒平瓦である。3は凸面に朱線の痕跡を残す軒平瓦で軒先の凹凸両面に粘土の剥離痕がある。4は丸瓦で凸面にヘラミガキ、凹面に糸切り痕、布目痕がある。5・6は凸面に縄叩きのある平瓦である。SD01からは図示した以外に、土師器皿、離れ砂を使用した軒丸瓦、古代~中世の瓦が出土しており、近世の遺物は認められなかった。このことから、SD01は中世と考えられる。

SK02は西壁にかかる位置で検出した土坑で、南北幅60cm、東西幅50cm(検出分)、深さ20cmである。埋土は2.5GY7/1明オリブ灰色と7.5Y5/1灰色の細粒砂混じり粘土が混在している。SK02からは7の凸面に縄叩き、凹面に布目痕がある平瓦が1点出土している。

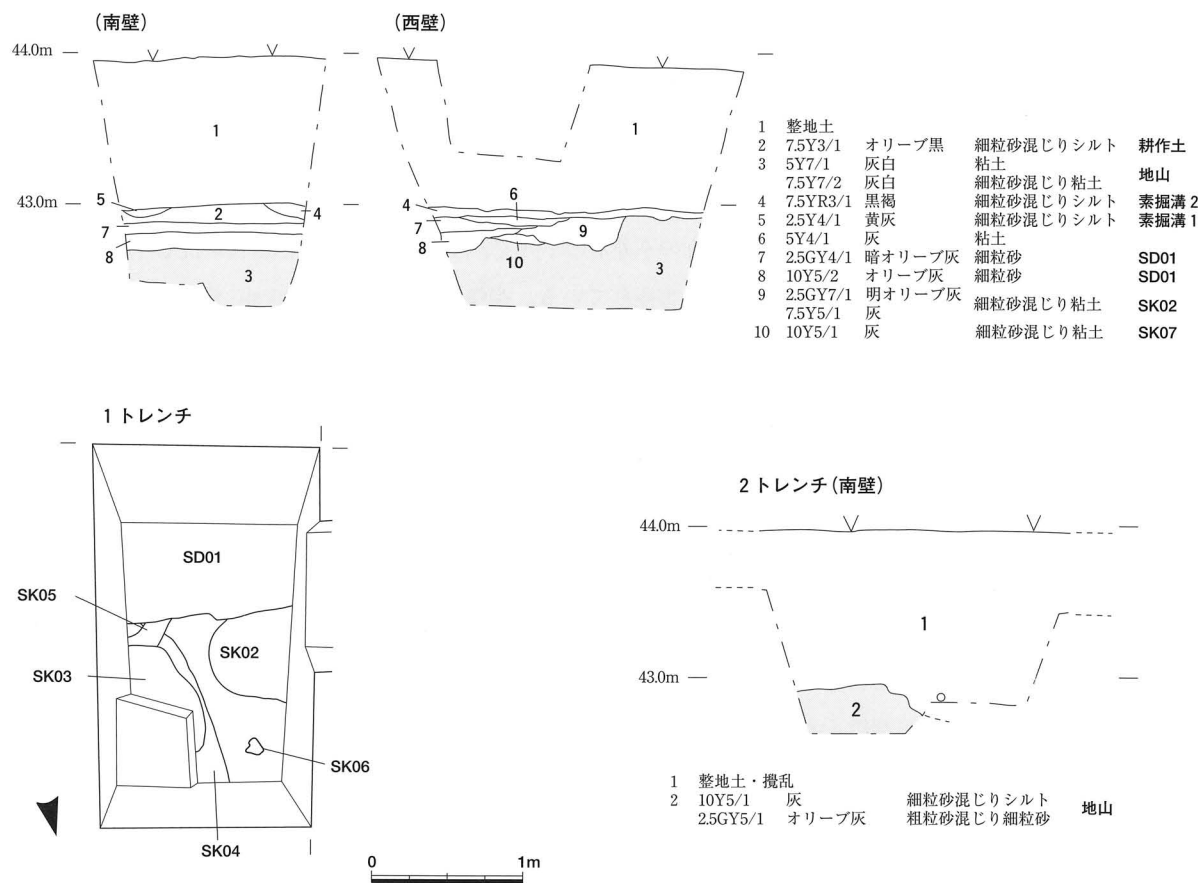


図13 1トレンチ検出遺構平面図・土層断面図および2トレンチ土層断面図(1/50)

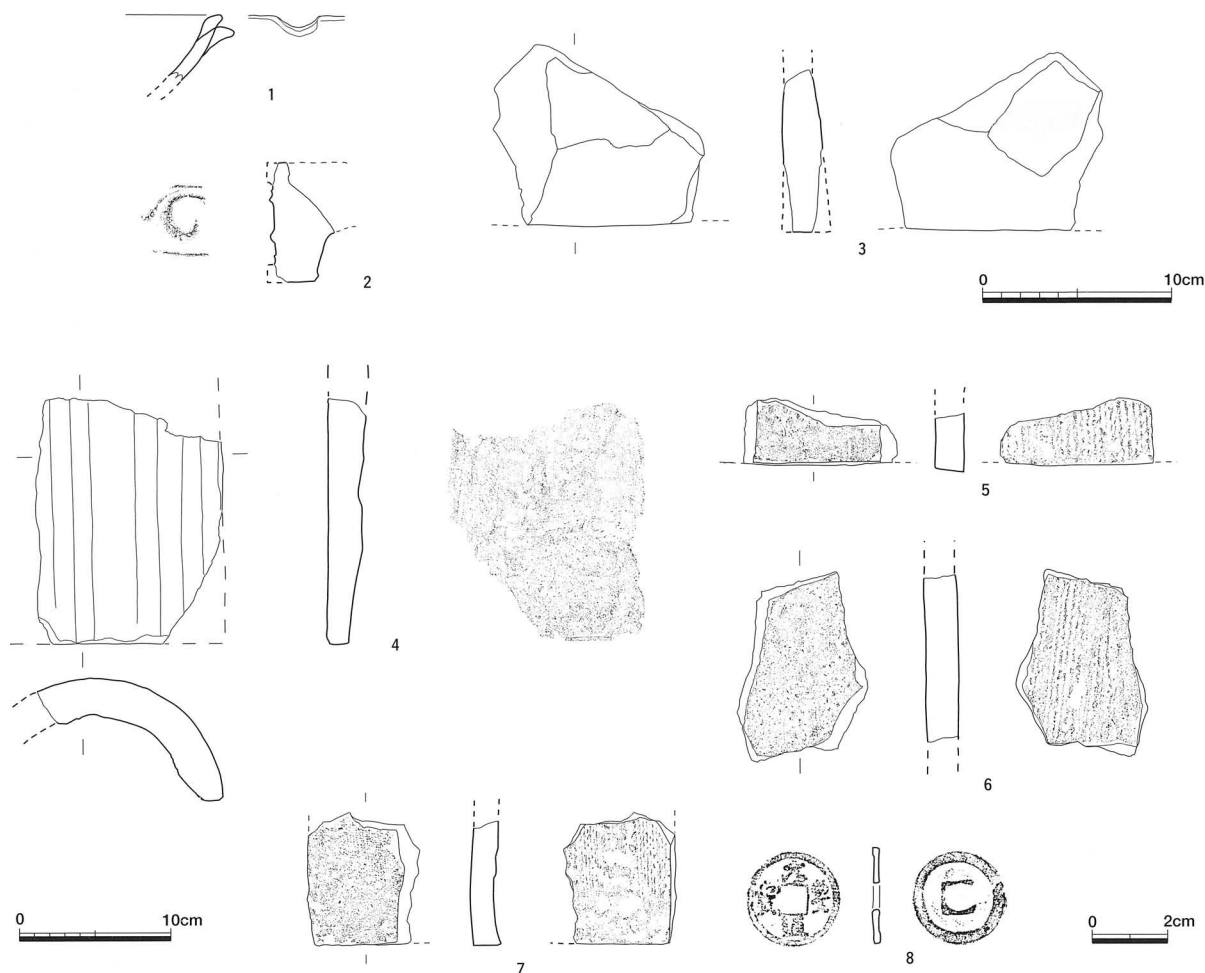


図14 1トレンチ出土遺物実測図（1～6：SD01、7：SK02、8：2層）

SK03～05は切り合いが激しく、遺構の全形も把握できないことから検出のみとした。検出面で確認した埋土はSK03が5GY5/1オリーブ灰色粗粒砂混じりシルト、SK04が2.5GY6/1オリーブ灰色粗粒砂混じり粘土、SK05が7.5Y5/1灰色細粒砂～粗粒砂である。最後に地山の断ち割りを行ったさいにSK04に掘削のおよんだ箇所があったが遺物は出土しなかった。SK06は平面が10cm程度の不整形の小穴で、埋土は10Y5/1灰色細粒砂混じり粘土。SK07はSD01を完掘した後に検出した遺構でSK02にも切られている。西壁断面では南北幅40cm、深さ8cmを測る土坑である。埋土は10Y5/1灰色細粒砂混じり粘土で遺物は出土しなかった。

3 まとめ

調査面積は狭かったものの今回の調査では遺構と遺物を検出した。片岡王寺の中心伽藍があると見られている校舎部分での初めての遺構の確認であり、これまで鉄筋校舎の建設工事によって遺構は破壊されていると予想されていたなかで遺構が残っていることを確認できたことは大きな成果である。校舎に近接した場所である1トレンチでは遺構が確認され、中庭の中程で工事の手がおよんでいないと思われた2トレンチでは削平を受け遺構面が残っていなかった調査結果をみると、現況を見ただけでは遺構の残存状況を予想することは難しく、校舎下であっても遺構が残っている可能性も考えられる。

今後も調査を継続して行い、遺構の残存状況を確認し、片岡王寺の中心伽藍について明らかにしていくことが必要である。



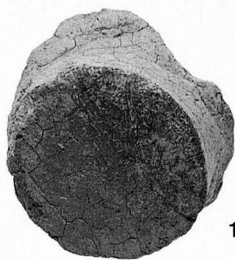
1 トレンチ遺物包含層検出状況（南東から）



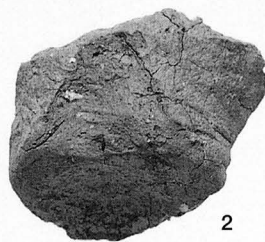
2 トレンチ完掘状況（南から）



3 トレンチ完掘状況
（西から）



1



2



3

出土遺物



解体前拝殿（東から）



解体前南拝殿（東から）



調査前拝殿基壇（北東から）



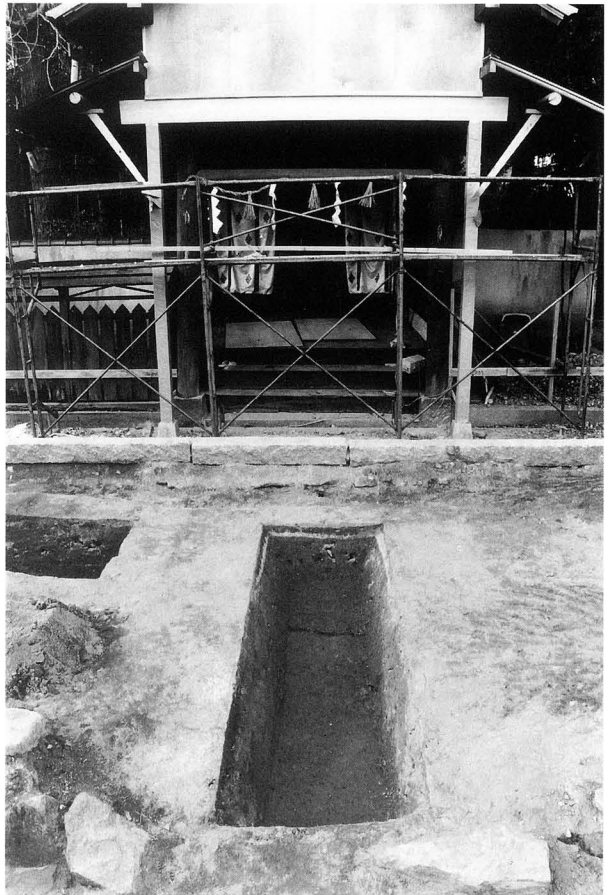
1 トレンチ遺構面A遺構検出状況（南から）



2 トレンチ遺構面A遺構検出状況（南から）



3 トレンチ遺構面A遺構検出状況（南から）



4 トレンチ遺構面A遺構検出状況（東から）



1・2トレンチ
石列検出状況
(南から)



1トレンチ
石列検出状況
(南東から)



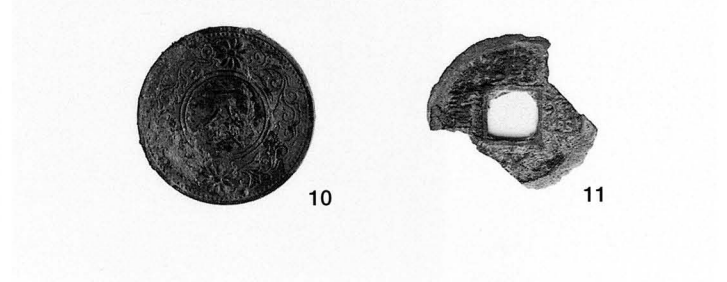
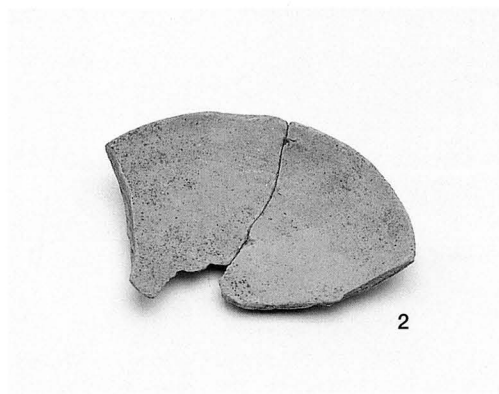
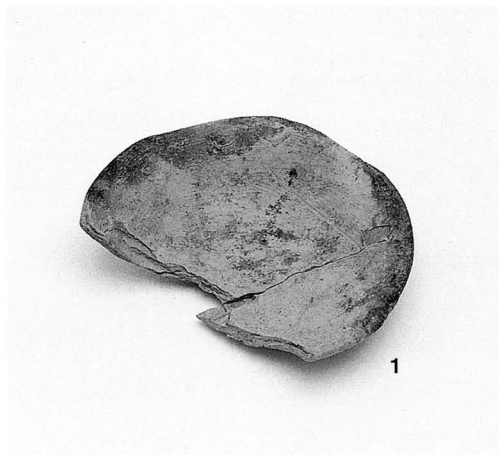
2トレンチ
石列検出状況
(北東から)



3トレンチ
遺構面B検出状況
(南から)



4トレンチ
南壁土層断面
(北から)



出土遺物 1



12



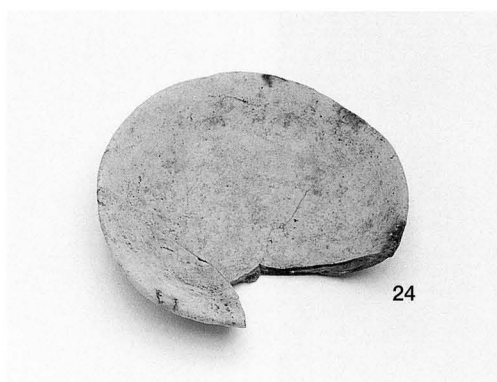
13



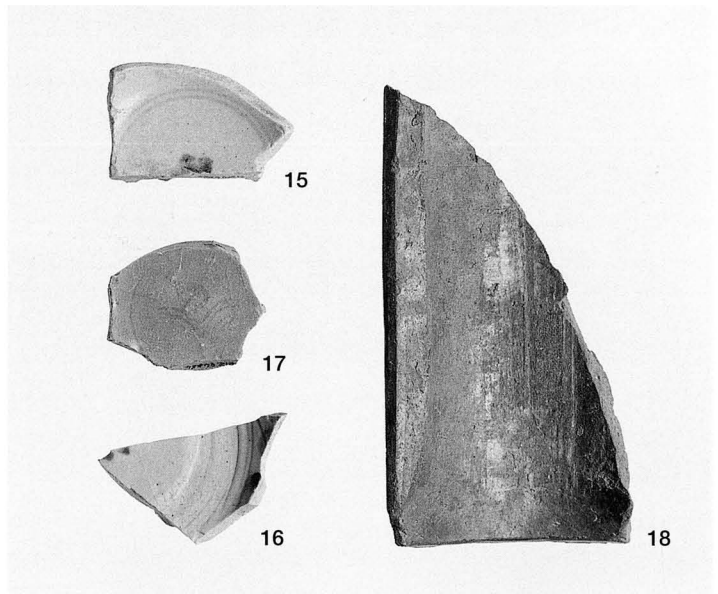
14



23



24

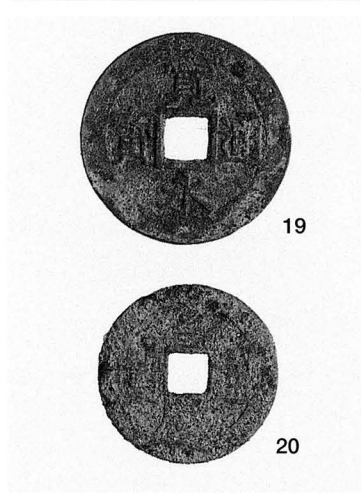


15

17

16

18

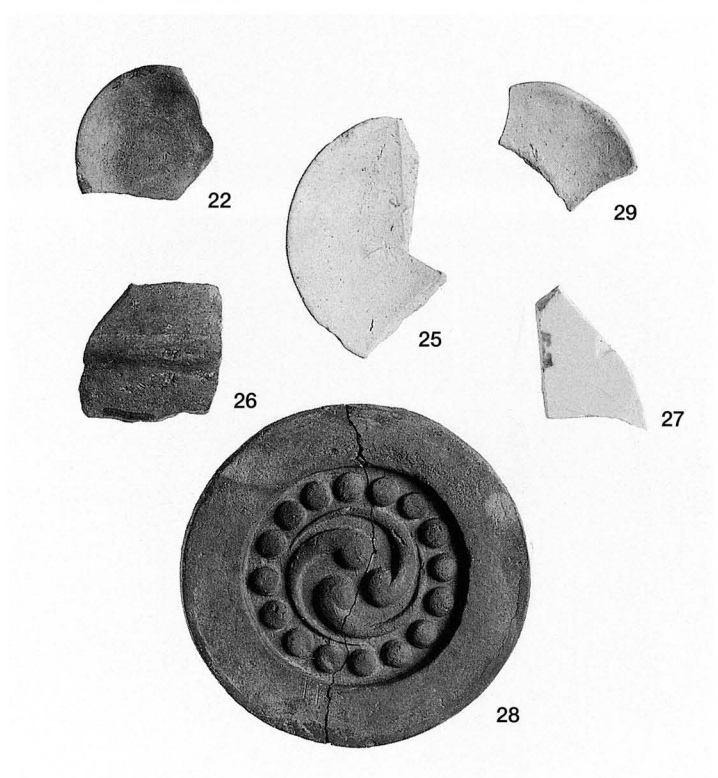


19

20



21



22

29

25

26

27

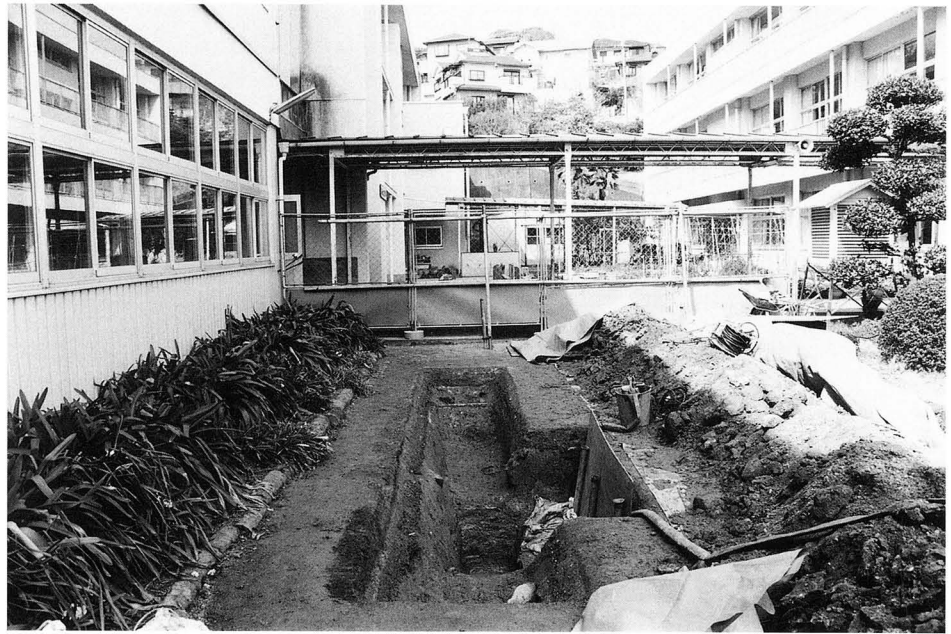
28



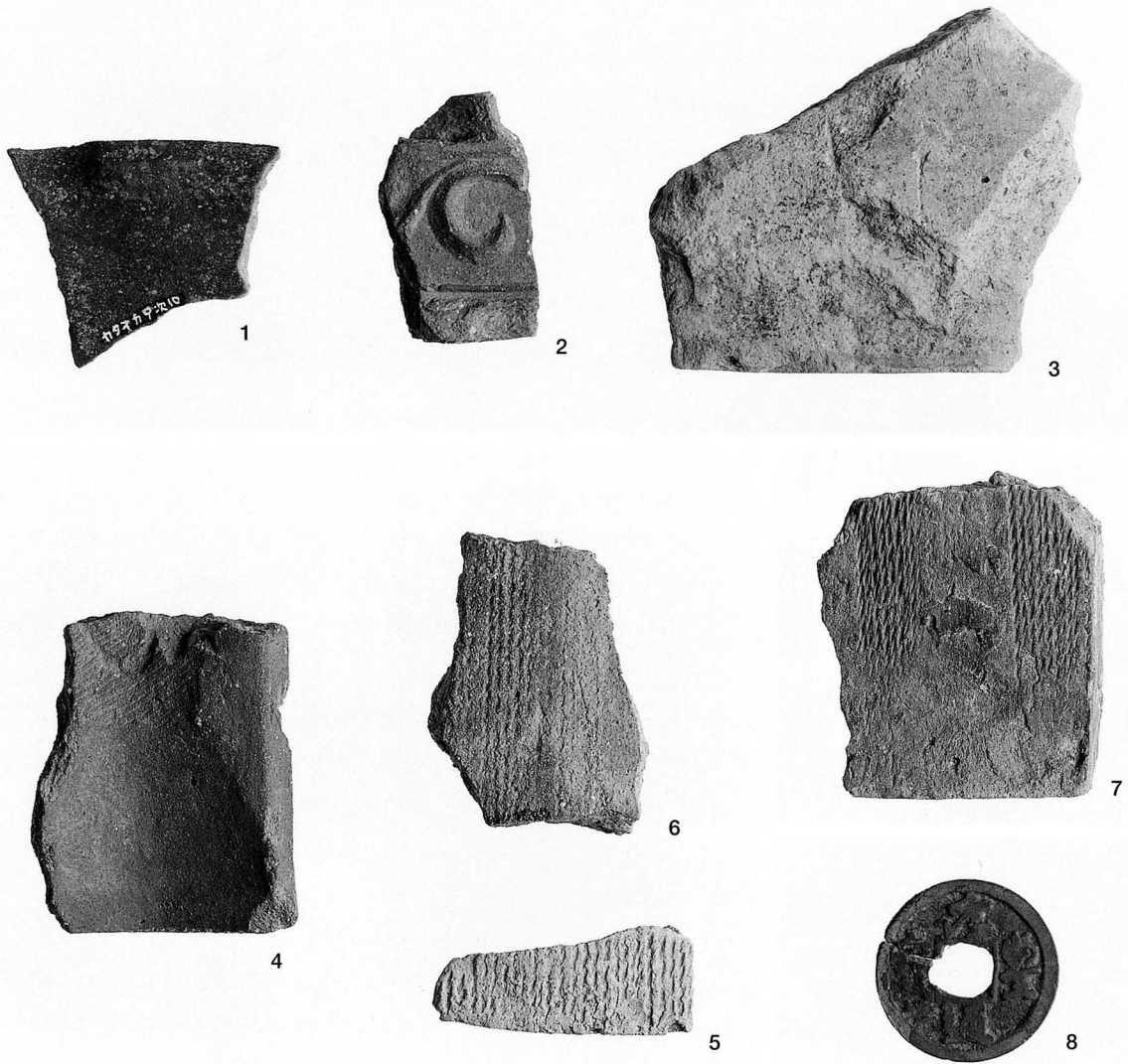
1 トレンチ
遺構検出状況
(北西から)



1 トレンチ西壁
土層断面 (東から)



2 トレンチ掘削状況
(東から)



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ふなと・にしのおかいせきだい5じ、かたおかおうじあとだい8じ・だい9じ —2007ねんどはくつちょうさほうこくしょ—							
書名	舟戸・西岡遺跡第5次、片岡王寺跡第8次・第9次—2007年度発掘調査報告書—							
シリーズ名	王寺町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第9集							
編著者名	岡島永昌、櫻井恵							
編集機関	王寺町教育委員会							
所在地	〒636-0002 奈良県北葛城郡王寺町王寺2丁目1番18号							
発行年月日	平成21(西暦2009)年2月25日							
収録遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村番号	遺跡番号					
ふなと・にしのおかいせき 遺跡 (第5次)	奈良県 北葛城郡 王寺町 舟戸3丁目 4298番18	29425	10B 35	34° 34′ 55″	135° 43′ 04″	2007.06.27.~06.28.	12㎡	個人住宅 建設工事
かたおかおうじあと 片岡王寺跡 (第8次)	奈良県 北葛城郡 王寺町 本町2丁目 1827番	29425	10B 5	34° 35′ 14″	135° 42′ 02″	2008.1.15~1.30	13.3㎡	神社拝殿 建替工事
かたおかおうじあと 片岡王寺跡 (第9次)	奈良県 北葛城郡 王寺町 本町2丁目 1698番1	29425	10B 5	34° 35′ 06″	135° 42′ 01″	2008.03.21.~03.28.	6.75㎡	範囲確認
収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
ふなと・にしのおかいせき 遺跡 (第5次)	集落	弥生	特になし		弥生土器、サヌカイト			
かたおかおうじあと 片岡王寺跡 (第8次)	寺院	近世	基壇、柱穴、溝、 石列		土師器、陶磁器、軒瓦、瓦、 銭貨			
かたおかおうじあと 片岡王寺跡 (第9次)	寺院	古代 中世	溝、土坑		土師器、瓦質土器、軒瓦、瓦、 銭貨			

舟戸・西岡遺跡第5次
片岡王寺跡第8次・第9次

—2007年度発掘調査報告書—

王寺町文化財調査報告書 第9集

2009年2月25日

編集 王寺町教育委員会

発行 奈良県北葛城郡王寺町王寺2丁目1番18号

印刷 株式会社 明新社

奈良市南京終町3丁目464番地

